

かつおきんや作品集

雪の人くい谷



かつおきんや作品集 3

雪のくい谷

— 続 五箇山ぐらし



偕成社



かつおきんや作品集 3

ゆき の 人 く い だに
雪 の 人 く い 谷
——統 五箇山ぐらし

NDC 913 偕成社 254p 21cm 1982 年
発行 1982年 5 月 初版第 1 刷

著 者 か つ お き ん や

発行者 今 村 廣

発行所 株式会社 偕 成 社

〒162 東京都新宿区市ヶ谷砂土原町 3 の 5

電話(03)260-3229 振替 東京 5-1352番

印刷 新興印刷・小宮山印刷/製 本文勇堂製本

ISBN4-03-737030-1 ©かつおきんや 斎藤博之 1982

Printed in Japan 落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

雪の人くい谷／もくじ

第一章 山奉行やまおぎよう

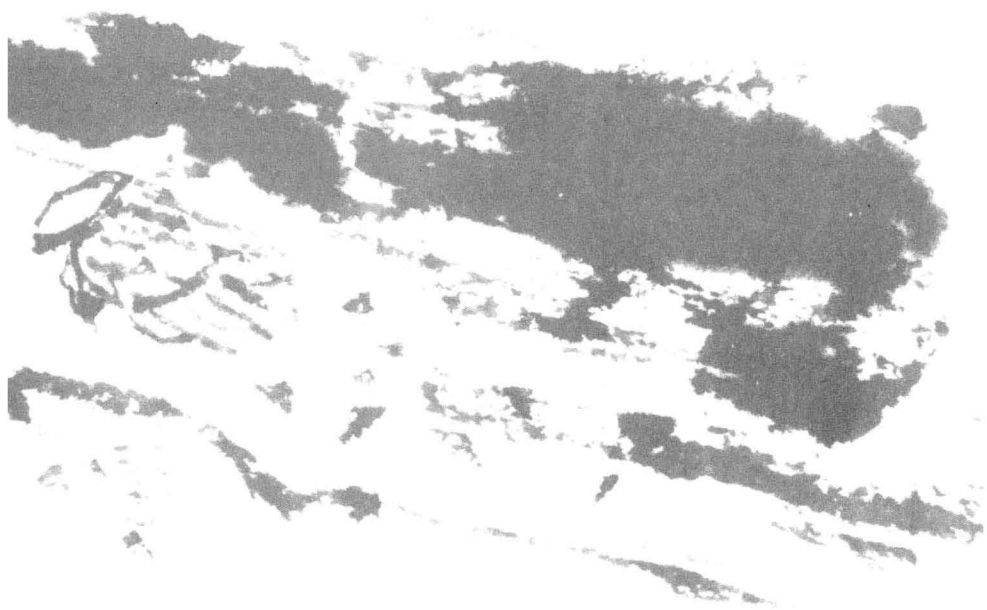
- 1 春のねがい 8
- 2 十村の知らせとむら 24
- 3 つづく雪ふみ 40
- 4 いばる山奉行やまおぎよう 60

第二章 よわい者いじめ

- 1 ケヤキ切りだし 76
- 2 お犬石いぬいし 89
- 3 天柱石まいりてんちゆうせき 100
- 4 公事場同心くじばどうしん 116

第三章 チヨウハイ

- 1 福光どまりふくみつ 131
- 2 流れ星ながぼし 146
- 3 もどり道 165
- 4 城端の柵じょうはな さく 182



第四章 いのちをかけて

1 報恩講 ほうおんこう 193

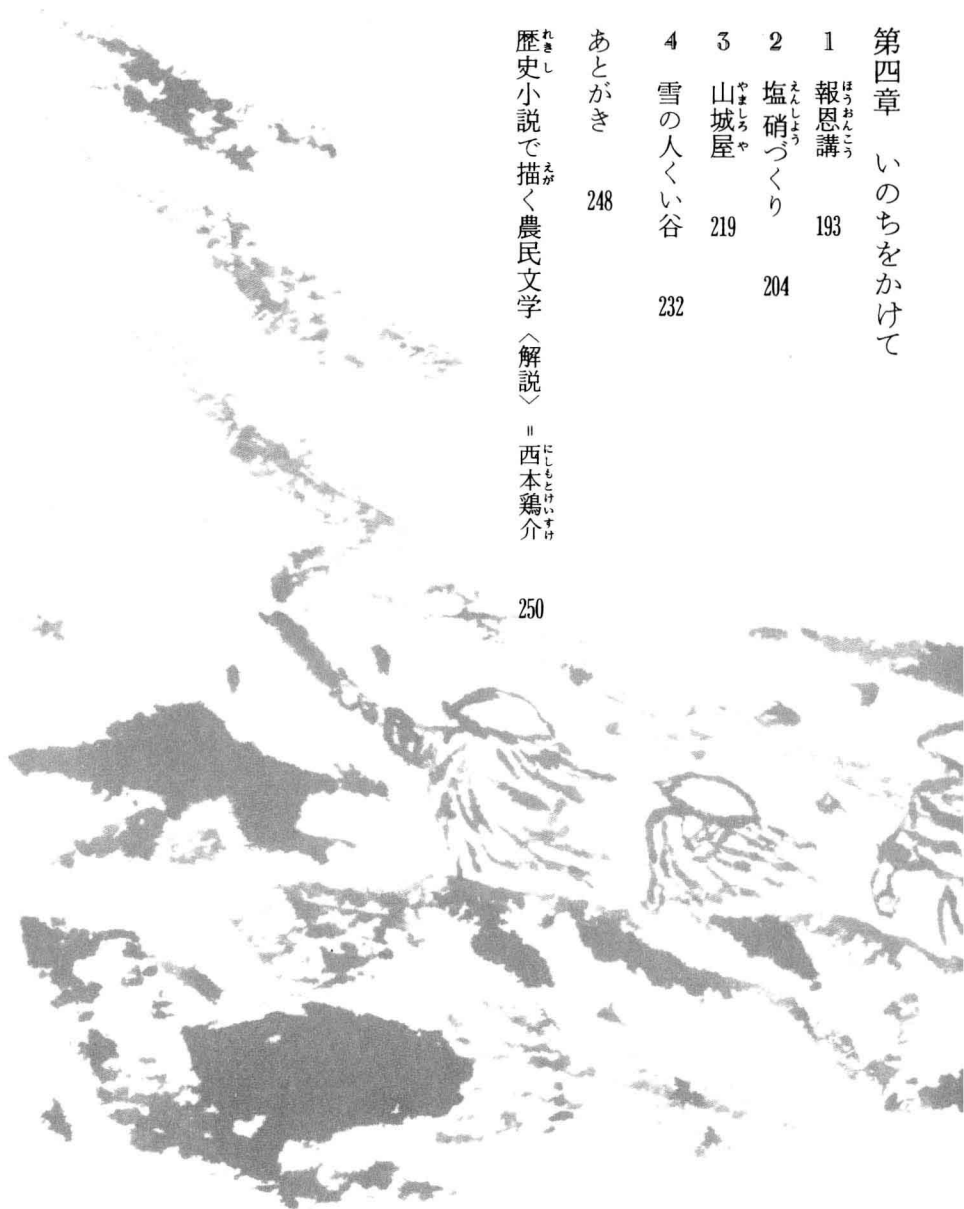
2 塩硝づくり えんしょう 204

3 山城屋 やましろや 219

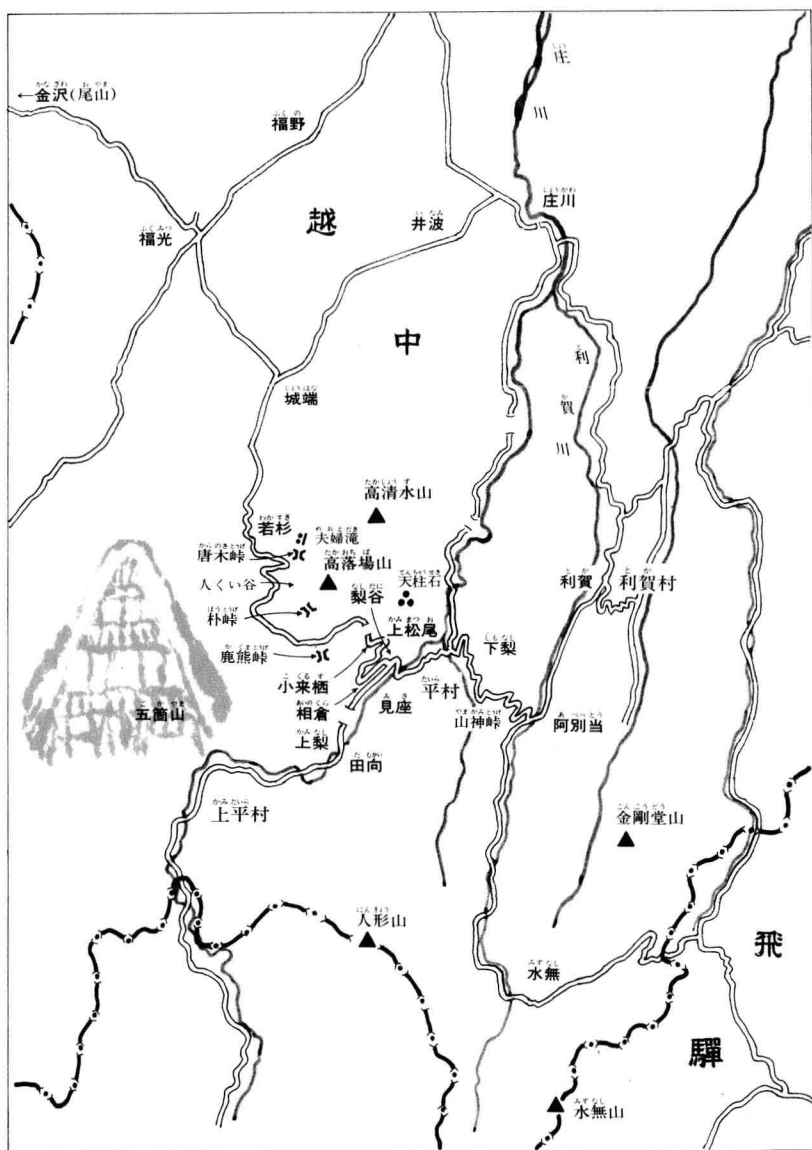
4 雪の人くい谷 232

あとがき 248

歴史小説で描く農民文学〈解説〉
|| 西本鶏介 にしもとけいすけ



装丁／司修
カバー絵／
さし絵／斎藤博之





著者・かつお きんや（勝尾 金弥）

1927年、金沢市に生まれる。金沢大学卒業後
中学校教師を経て、現在、愛知県立大学助教
授。日本児童文学者協会会員。北陸児童文学
会の中心メンバーとしても活躍中。多年郷土
史とくに江戸末期の庶民の生活や闘争を研究
し、その面での著書が多い。『天保の人びと』
（サンケイ児童出版文化賞）『七つばなし百万
石』（日本児童文学者協会賞）等多数を本作品
集に収録する。住所／金沢市笠舞 1-19-22

画家・斎藤博之（さいとう ひろゆき）

1919年、中国瀋陽に生まれる。帝国美術学校
洋画科卒。毎年、東京銀座・日本橋などで個
展を開催。絵本『しらぬい』（講談社出版文化
賞絵本部門賞）『がわっぱ』などのほか、『花
咲か』『山へいく牛』『熊野海賊』などさし絵
の仕事も多い。住所／鎌倉市笛田1779-12

装丁・司 修（つかさ おさむ）

1936年、群馬県に生まれる。主体美術協会員。
タブローのほか種々の技法を駆使し華麗典雅
な装丁・さし絵・絵本製作者として定評があ
る。著書『風船乗りの夢』画集『コラージュ』
絵本『はづかしがりやのぞう』『恋人たち』『ひ
かりのゆびわ』『魔女の森』『おとうさんだいす
き』など多数がある。住所／武蔵村山市岸109

かつおきんや

雪の人くい谷

—— 続 五箇山ぐらし



第一章 山奉行

1 春のねがい

天保十二（一八四一）年春のはじめ、松吉たちが五箇山へきて、まる二年になろうとしていた。この冬は雪がおおかったから、作助じいたちがつもごりで城端へ出かけるのも、たいへんだった。かえってくるまで、松吉のおとうたちは、

「天氣がくずれにやよけれどなあ。」

と、空ばかり見ていた。松吉も、なんどもまっ白い山やまともり空をながめに出て、さっばりしごとが手につかなかった。

かえってきた作助じいの話では、決算はまあまあちようどというところだったが、山廻役から、金沢にある本願寺別院をたてなおすための材料に、ケヤキを切ってだすようにいわれたらしい。「田向からは五本、つゆいりまえに切りださにならん。はようすましてしまいたいけど、こん



なに雪がおおかつたら、どうもこうもならんわい。」

昔^{むかし}から、五箇^{ごかやま}山のこのあたりでは、人形^{にんぎょう}山の雪がへっていつて、人の形が見えるようになったら、山へ木を切りにいつてよいといわれている。だから、作助^{さくすけ}じいは、毎朝^{まいあさ}のように人形^{にんぎょう}山をながめているが、いつまでたつても人形^{ひとがた}が出てくるところか、白一色のびょうぶみたいだ。

「まっとるときちうたら、へしないものじゃ。いつか春はくるにきまっちよるもんじゃけどな。」作助^{さくすけ}じいはこういいながら、人形山を見ていたが、そのことばのとおり、つも^{つも}ごりから二十日ばかりたつと、にわかにあたたくなくなりだし、日ざしもつよくなってきて、雪が目に見えてとけだした。いよいよ春がきたのだ。

ある朝、目をさますと、きりがまっ白にたちこめて、手をのばせばとどくほどちかくに立っている杉^{すぎ}の木さえ、ほんやりとうすくなつて見えた。作助^{さくすけ}じいがうれしそうにいった。

「きょうはよい天気になるぞ。」

つもごりの三日まえに生まれた仙太^{せんた}の赤ん坊^{あかぼう}のオギヤア、オギヤアという泣^なき声^{こゑ}も、けさは元氣よくきこえる。

朝めしがすむと、松吉^{まつきち}は、床下^{ゆかした}にもぐつた。鼻にツーンとくるつよいにおいのなかで、からだをかめたまま、すきを土ふかくつき立ててはおこし、ほりかえしていく。

いやな、つらいしごとだが、このために自分たちはここへよこされたんだぞと、自分にいいきかせて、松吉^{まつきち}は汗^{あせ}をたらしながらがんばった。ひろい床下^{ゆかした}はおよそ四つにくぎられている。その

ひとくぎりをはりかえすと、しごともしひとくぎりだ。

やっとひとくぎりすませて、やれやれとはいだす。土間^{どま}に出て、ぐっとからだをのびし、大きく息をすう。床下^{ゆかした}しごとのあとは、いつも思うのだが、まざり気のない空気は、じつにうまいものだ。スーッとすいこんで、胸^{むね}いっぱいにくらませ、ハーツとはきだすと、からだじゅうがきれいになる感じがする。

戸口からは明るい日ざしがいりこんで、雪がきらきらとかがやいている。

思わず外へ出ようとしたとき、水屋^{みずや}で紙すきをしているおかあのはうへ目がいった。こちらもしひとくぎりついたのか、手にもっていたすげたをすき舟^{ふね}のまへのほうに立てかけて、あいた手で腰^{こし}をトントンとたたくと、

「フーッ……」

とふかいため息をついた。おかあは、またあのことをいうぞと、松吉^{まつきち}は、すこしはなれて土間^{どま}に腰^{こし}をおろしているおとうのほうを見た。みのをあんでいるおとうも、おなじ思いらしく、ちらっと紙すき場のほうへ目をはしらせたが、すぐにまたうつむいて、こまかく指をうごかして、みのづくりをつづける。

おかあは、こちらへ背^せをむけたまま、こんどは首をぐるぐるとまわしだした。松吉^{まつきち}は、肩^{かた}をたたいてやりたくなって、話しかけようとした。そのとき、へやのほうから、作助^{さくすけ}じいのしやがれ声がした。

「松^{まつ}。床下^{ゆかし}しごとは、もう終わったが。」

「うん。ひといきにすましてしようた。」

「それはご苦労^{くろう}やったな。どうや、じいにつんだって山へいってこんか。木が雪でいたんどらんかどうか、ひとまわり見てくるがじゃ。春のしごとをかんがえんならんでな。」

こんなよい天気^{てんき}に外へ出られるとは、なんとありがたいことか。しかも、作助^{さくすけ}じいはずづいていう。

「うまいことすりや、ヤマドリがつかまるぞ。」

「ほんとけ？」

松吉^{まつきち}は思わず声を大きくしてしまった。それを見て、めずらしくおとうがからかった。

「松^{まつ}につかまるヤマドリやったら、よほどおとい（おろかな）やつやな。くうても、うまないやろ。」

松吉^{まつきち}は、むきになっていいかえした。

「ほんなこというがなら、つかまえてきても、おとうだけくうたらいかんぞ。なあ、おかあ。」

と母親^せの背^せなかによびかけたが、すき舟^{ふね}のなかをざぶりでかきまわしたおかあは、見むきも返事^{へんじ}もしない。このごろ、すっかり無口^{むぐち}になってしまったおかあだ。

松吉^{まつきち}はわらぐつをはき、かんじきをもつと、作助^{さくすけ}じいについて外へ出た。すきとおった青空^{あおぞら}。白い山やま。トンビがゆうゆうと輪^わをかいてとんでいる。

「やっと春らしいなってきたな。」

屋根の雪もきれいにおちて、カヤはゆげをたてている。つもった雪がきらきらとまぶしい。

「ヤマドリつかむがなら、正市まさいちもよぼっていいけ。」

「よいとも。つれがおったほうが、にぎわしかろうて。」

正市まさいちは、うちでいやいやすげ笠がさづくりをしていたところだったから、作助さくすけじいさがさそつたら、よろこんでとびだしてきた。村はずれまでくると作助さくすけじいがいった。

「かんじきは、きしっと、くくられ。」

いわれたとおり、しっかりとかんじきをはくと、さをあらそつて歩きだした。

雪は、まっ白いなめし皮がなだらかにひろげてあるように見えるが、一間けん(約一・八メートル)

以上まだつもっている。

作助さくすけじいを先頭せんとうに一列になつてのぼっていくと、たちまち汗あせが出てきた。日があつい。歩きながら、作助さくすけじいが話しかける。

「こんな天気なら、あわもなかうけど、雪の山は、いつでも高たか(上のほう)を見て歩くことやぞ。」
あわというのは、つもった雪のうわつらがおちるなだれのことだ。村のおとなたちは、冬の山ではこれがいのちとりだと、よく知っている。雪におおわれているクワ畑の上をよこぎっていくと、ウサギの足あとが左右にななめに、何本もついている。

「おじい。ウサギはつかまらんけ。」

松吉まつきちがきくと、作助さくすけじいは歩きながら、



「おまえらの目がよけりやつかまるぞ。」

そこでふたりはあわててあたりを見まわしたが、どこもまっ白。上のほうにヒノキやブナの林、左のほうにこんもりと杉林があるだけだ。

「見えんか。見つからんように、冬場は白うばけとるさかいにな。」

雪がまぶしいので目をほそくすれば、見えるのは足もとだけになる。あつくてしかたがないから、胸もとを大きくはだけると、つめたい風がサーッと雪原の上をなでてきて気もちよい。正市がたずねる。

「おじい。ヤマドリとウサギと、どっちが見つけやすいけ。」

「そりや、ヤマドリじゃわい。あいつは白うばけることもできんやつやし。」

と、それから作助じいはいは、歩きながら、ヤマドリのつかまえかたをおしえてくれた。ふたりはきいているうちに、すぐにもつかまえたくなってきた。

ちょうどヒノキやブナの林にさしかかったところだ。

「おじい。おらたち、このへんでヤマドリさがしてもいいやろ。」

というと、作助じいはいは林のなかへひとりではいっていった。

「松。おまえ、そっちをさがせよ。おら、こっちをさがすさかい。」

「ようし。おらがさきにつかまえるぞ。」

ふたりはよこにならんで、やぶや、木の枝が雪の上へつき出ているところなどを、そろそろと